

討論要旨

司会 岩本由輝

長谷部報告について

最初に用語の意味が問題となり、まず鳴田から、所有レベルの同族団と経営レベルの同族団の意味について質問があった。これについて長谷部は、これは長谷川氏の論旨について藤井氏がふれた際用いられた語で、同族団を所有の面からみた場合、相続的等の面で親族関係が基軸としてとらえられるのに対し、経営の面からみれば、労働組織や小作関係など非親族家を含む同族団が浮び上ると説明した。さらに、この所有関係—親族関係を中心みると、いわば社会学的切り口ではないか、という長谷部に対し、細谷から疑問が出され、親族＝血縁を見るのも、経営＝機能を見るのも、ともに社会学の対象となるとされた。また岩本から、所有—親族の面が重視されるのは、むしろ個人の自立化傾向と平行するもので、血縁が問題となるのは近代に近づいたときであるという意見があつた。

近世初期では、親族・非親族という血縁関係の有無よりも、経営や労働の面から、非親族をも血縁規範でとらえきることになっていたことが重要であろう。竹内も、親族的同族団と家連合的（非親族を含む）同族団も、原初形態では区別がなかつたと考えていた。親族的系譜関係だけを重視することには無理があるのである。

つぎに、親族分家と非親族分家の相違に関連して、非親族分家や名子は、家産を分与されても一代限りで代が替れば再給されるといふ有賀・長谷川両氏の見解について、菅野から疑問が出された。これはヴェーバーの恩給制と同じというが、果して日本の名子がそ

であつたかという問題である。岩本は、岩手県津軽石村の近世名子の例として、「永々名子として」子々孫々までという表現もあり、再給の手続はみられないとした。安孫子も煙山村の例から名子は個々人が名子になるというより、名子分家となつたときは、家が名子としと続くのであって、個人の代替りごとに再確認されているとは思えないとした。むしろ、親族・奉公人・名子という差違が厳然としてありながら、分家として共通に扱われる面があることこそ、同族団の特質であると考えるのである。菅野も、ヴェーバーが示したのは、支配階級の中で国王と領主との関係が自立した個人という性格をもつとき生じたもので、労働組織としての分家関係で再給という観念が出るとは思えない」と述べた。

ただこれは石神村の事実にも関わることなので、さらに有賀氏の研究にあたることにした。

つぎに報告者長谷部より、長谷川氏が重視する、家・屋敷地をもつか否かが家の自立にとって大きなポイントとなるという点につき、有賀氏はこれを名子の問題を解く鍵とするのは難かしいといつているが、この点はどうかと質した。竹内は、有賀氏の論も変っているが、この点はどうかと質した。竹内は、有賀氏の論も変っているので、「農村社会の研究」の段階では、柳田氏の「親と労働」に拠つて、そこから喜多野氏との論争もあつた。この点は、この点はどうかと質した。竹内は、有賀氏の論も変っているので、そのうえ、家・屋敷地の所持と家の自立という視角も出てくるだろうと述べた。菅野は、家・屋敷地がないから自立していない一人前でないということではなく、自立すれば必然的に家・屋敷地を持つのではないかと、自立の実態が先でないかと主張した。これに対し、安孫子は、近代の南郷村の例では、経営的には自作・自小作土層を上廻る内容をもつ大小農が「借屋」層であるために、部落

寄合にも出席できず、家主（地主）の監督下で村生活をしていることを述べた。つまり身分規定として家・屋敷の存在が考えられる。名子抜け・借家抜けというのは、別な地主－名子の関係に基くのである。また岩本は、屋敷地は中世では別な意味があり、集落自体が屋敷といわれることもあり、垣内の意になる。近世では、農家の居住地が道路沿いに作られ、それが一人前の根拠になつてくる。その他人の屋敷内に家を建ても一人前とみなされない例もある。つまり屋敷は制度的に一人前の基準となつてゐる。竹内も、屋敷を持つことが百姓としての賦役負担の根拠なので、それが一人前と見なされるとした。また安孫子は、屋敷地を借りることは所有関係に関わることであるが、その地代は労働地代であり、その労働は家主の経営に使用されるので、所有－親族関係、経営－非親族関係という明確な区分はできないとした。また、名子分家の経営的自立というが、それが名子抜けをしたらどういう分家になるのか。名子抜けとは宅地代としての労働を出さないということだけである。さらに親族分家の方も、分家当初と数代経たあとでは位置づけも変るので、親族・非親族という区分がそんなに大きいとは思えないとした。

ここで細谷から、社会学では、家アプローチと家族社会学アプローチがある。前者では歴史の人と共通になる面が多いが、家族社会アプローチでは親族関係が中心となり、歴史学との接点が薄い。問題は、親族といえば限りなく広がるので、そのなかで家族の範囲をどう決めるかが問題となる。家というと家業経営の集団という意味が大きく、非親族が入つても本質はあまりちがわらないことになる。家族関係・親族ではその点が問題となつてくる。現在の家は家計も

分散して、家アプローチが困難となり、親族アプローチでないと意味がないのかもしれない。長谷川氏の問題提起は、そうした後の時代とのつながりを考えると親族同族団をとりあげる意味もあると思うと述べた。竹内も家と家族のちがいはあるし、家としてとらえることの意味は大きいとした。有賀氏も家でとらえたが、そのなかに非血縁家族も入れて家と家族と同一視した。長谷川氏はそれを区別することを主張しているのであろう。安孫子は、近代に近づくにつれて家より家族が大きくなるので、家と家族の段階的関連を考えないといけない。現代では家どころか家族すらも解体している。やはり家か家族関係かではなく、両者の関連として一本の視点にしたいと考えた。

最後に、長谷川氏の指摘した二つの視点が有用であろうが、近世の分析をこの手法でできるかという疑問があつた。そこでは二つの明確な分離が必要かということである、という問題意識が示されて、討論を終了した。

佐藤報告について

まず用語について、斎藤より、混住化と兼業化とをどのように区別しているかと質問があつた。集落をみると兼業化が混住化に至る過程を問題とするのか、それとも他から入居の混住も含めているのかという点について、佐藤は、後者もあるが、対象村は前者の傾向が強いと答えた。また、農家についてセンサスの対象としては農家であるが、意識は農家でないのが多くなつてゐるが、ここでの農家とはなにかが問題となつた。とくに全面委託の家は農業から完全に離れているが、これをどう扱つかという点でセンサスの基準のよ

うに農業生産手段を所持していれば、経営がなくとも農業として考えるとした。なお、新池は本郷に対し、新しい開拓集落で、かつては枝郷として扱われ、これが現在の蔑視につながっていることが確認された。

本論に入つて、まず安孫子が、機能的集落はなくとも、集落への定住化志向が強いというが、それはどこから出でてくるかを問題とした。佐藤の問題は、定住志向の強い人が、そこでいかに生活するかを考え行動した時、共同関係として集落的なものが背景に出てくるという点であった。安孫子は、村の外部からの波に自身で対応していく過程で共同性・集落的なものが出てくるのはいいが、問題はその外的条件に対応して外部に脱出することなく、そこに留まつて対応しようという根柢を問題にした。単に外部に生活条件がないということだろうかということである。これについて、定住志向は無自覚ということもあるが、計算上の志向が強まっている、とくに通勤兼業条件があれば定住志向は強いという実態があるという回答があつた。

集落的なもの、共同性が生じてくるのは、明らかに個別経営・個別の生活が前提としてあり、その補完・調整の意味からすると佐藤は述べた。これに対して細谷は、一九六〇年代七〇年代始めまでは、部落ぐるみで折合ってやれたが、機械化の進行は個別大経営を可能にし、それで部落ぐるみの共同はなくなり、個別経営にプラスになる範囲での、小規模・単純機能の集団だけが生れることになつた。外からの波で何らかの共同が必要となつたと考えられるとした。その場合もなぜ脱農・離村をしないかは問題として残るのである。ついでその定住志向の内容について、細谷から、兼業化の問題は、

いまや零細農の農業か兼業かの選択でなく、大農家も含めて、複合化が規模拡大か、または兼業かという形で、同一レベルの選択肢の一つとなっている。その選択で生活を支えていると指摘された。また、ライフサイクル的にみても、農業の選択は世代ごとになされ、隔世代農業ということもあり得る。つまり、生活は農業という单职业種だけで考えられない状態にあるとされた。にもかかわらず集落、定住志向が存在し続けるのである。

斎藤は、この村的、共同組織の内容として當農組織・町村会などが出来たが、それがなぜ集落という枠にしばられるのか、生活世界、定住志向の計算で、集落利用が得ということになるのか、既存の社会関係の利用が有利ということとかと述べた。安孫子は、この点で、集落がすでに意志決定機構でなくなつたとしても、なお合意形成という受身の面での機能はある。それが、伝統的なものとして継続しているのかどうか、とにかく何かをやるときに集落の合意形成機能が、上からも自主的なものにも利用されている。岩本は、その機能は明治以降の行政末端機構の機能が、固定的に残つたものと考えられないかと指摘した。

そこから、相続や離村のときに、集落はどう関わるかが問題となつた。土地が資産化し、家が生活の場という近代性が強まるにつれ、個別性、個人性が強調されるので、合意形或の意味も弱くなるのではないかということである。つまり、集落の機能がバックアップできる範囲は次第に小さくなり、個別経営・個別の家の生活が前面に出てくるのが実態であろうとされた。この場合、集落的なものも機能は特定分野に分化し、それに関わる人も各家のなかの特定の人にならざる者も現れるのである。